

# 鱻のような紳士



コンパクト・ブックス

# 饅のような紳士

一九六八年七月二十五日 初版発行  
一九七〇年十一月五日 十四版発行

定価二八〇円

著者 梶山季之

発行者 陶山 巖

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ十

電話 東京(265)六一一一  
振替 東京 一五六五三

印刷所 凸版印刷株式会社

著者との了解により検  
印を廃止いたします。

# 鱒のような紳士

梶山季之



コンパクト・ブックス

集英社







## 目次

|       |     |
|-------|-----|
| ヒッピー族 | 九   |
| 東京の夜  | 四六  |
| 虚々実々  | 八七  |
| 木枯の季節 | 一一一 |
| ああ無情  | 一四三 |
| 裸にて   | 一六九 |
| 目には目を | 二〇六 |
| いざ決戦  | 二四六 |



鱻のような紳士



## ヒッピー族

……新宿は、夜の町である。

パリの盛り場が、一次大戦後、モンマルトルからモンパルナスに移り、二次大戦後、サンジェルマン・デ・プレに移動した如く、東京の盛り場も、江戸時代の上野・浅草から、明治以後は銀座に移り、そして敗戦後は、銀座から新宿、渋谷、池袋などに移った……と云えるだろう。

その盛り場のなかでも、最も賑わうのが、夜の新宿だった。

それも夕方ごろから、そろそろと新宿めがけて、人々が集ってくるのだ。

はじめて、この夜の新宿の殷賑ぶりに接した者は、  
「へ東京には、なんと人間が多いんだろう！」

と思つて、度胆を抜かれるに違いない。

だが、子供の頃から、この新宿で育った人間には、珍しくも何ともない光景なのだった。

日本橋生まれの西形久美子にとって、新宿は、ある意

味では憧れの、そして、ちょっぴり怖い街である。

久美子は今年十七歳になる。

高校三年生なのだ。

家は、日本橋で料亭を経営していた。日本橋で割烹「唐獅子」と云ったら、ちょっと名の売れた存在である。

久美子は、その末娘だった。

姉二人は、銀行員と医師に嫁ぎ、家に残っているのは、久美子一人だった。

兄は一人いて、いま、銀座の料亭で板前修業中なのだ……。

父はいない。

十年前に、胃潰瘍で死亡したのである。

従つて、いま「唐獅子」を取り仕切っているのは、久

美子の母である西形千代なのであった。

久美子は、その日の夕方、千代と喧嘩したのであった。

原因は、母の千代が、久美子の担任教師である松任谷まつとうや潔と怪しい……という噂が、ぱつと学園内に拡がったからだ。

松任谷は、英語の教師で、近頃は外人のお客も多いところから、母に頼まれて月に二回ばかり、女中たちに英会話を教えにやって来るようになった。

いまから半年前のことである。

ところが最近は、用事もないのに、週に一度ぐらい顔を出し、母の居間で夜おそくまで話し込んで行くようになった。

久美子は、男性的なスポーツマン・タイプの松任谷が好きだった。

ところが、こともあろうに、その松任谷潔と母の千代とが、怪しいという噂が、いつしか級友のあいだに流布されていたらしいのである。

久美子は、それを知らなかった。

親友の二、三にきいてみると、みんなそれを否定しなかったのだから、なお悲しいではないか。

母の千代は、

「あなたの進学のことで、先生と相談したことはありませんよ。それに英会話のお礼を受取って下さらないから、外でお食事して、洋服をつくってさし上げたんじゃないの……」

と説明した。だが、久美子はカーッと逆上して、家を飛び出してしまったのである。

心理学者の説によると、人間が成長する過程において大切な時期は、四歳から七歳までの幼児期と、十五歳から十八歳ぐらいまでの反抗期であるという。

その意味では西形久美子は、その反抗期にあったのだった。

久美子の通っている学園は、服装はすべて自由であった。だから東京中の学園でも、服装が派手なところで見られている。

パーマメントと、ハイヒールは禁じられていた。ところが、カツラなら構わないだろうと、セットしたカツラをかぶった生徒が登校し、あわてて禁止事項にカツラが付け加えられる……という学園騒動を起したところである。従って、久美子の服装も、ちょっとみたところ、地味なB・Gぐらいにしか見えなかった。

伊勢丹前から、紀伊国屋書店に向かって歩きながら、久美子は、

「へなぜ、新宿へ来たのだろうか」  
と思った。

折しも、宵の七時である。

空を見挙げると、赤、青、黄など、さまざまな色彩のネオンが、新宿の上空を摺り鉢状に明かるく浮き上らせている。

久美子には、今まで大して深刻な悩みなどなかった。靴が欲しいとか、洋服が欲しいとか、電気ギターを買って貰いたいとか、せいぜい、そんなところである。

そんな悩み程度なら、二人の姉でこと足りた。

だが、松任谷潔と母の千代の問題は、そんな軽い問題ではない。

電気ギターへの欲望を、蚤か南京虫ぐらいの大ききとしたら、その問題の方は、象か、鯨ぐらいの大ききになる。

家を飛び出した時は、たった一人の兄の、克彦に訴えに行こうと思った。しかし、板前修業中の兄にとって、その頃は、いちばん多忙な時刻だったのだ。

久美子は、それで地下鉄に乗って、新宿へ出たのである。

へママって不潔だわー！

へ第一、あたしの進学のことで、松任谷先生と相談して

るなんて、話したことも、ないじゃない！

へそれに、先生と二人で、外で食事して、洋服をつくってあげただなんて！

へ先生も、ママも、陰険だわー！

久美子は怒った顔をして、ずんずんと雑踏の中を縫って歩く。

通行人の誰かれに、肩をドシン、ドシンとぶつけて歩きたいような心境である。

へ不潔！ 不潔！ みんな不潔！

久美子は、心の中で呟きつづける。

いつしか紀伊国屋書店の前まで来ていた。

久美子は、あてもなく二階へ昇るエスカレーターに足をかけていた。

水色のセミ・タイトの下から、仔鹿のような脚がすらりと伸びている。カッターシューズは黒だった。

ブラウスは白。

それに水色の、薄手のカーディガンという服装である。

髪の毛は、長く伸ばして、背中中の貝殻骨近くまであった。

一見、目立つ顔立ちなのである。

書籍売り場を、久美子は、ハンドバッグをさげて、ぶらりぶらりと歩いた。洋書がずらりと並んでいる。なんとなく、高そうな本ばかりであった。

洋書棚の前に立つ人は、みんな首を傾げている。おそらく、そうした方が、背文字が読み易いのだろうか。

久美子は、なぜ洋書を買う人のために、本を縦に並べず、横に積み上げておかないのだろうか、と思った。

と、そのとき――。

「もしもし、お嬢さん」

という声がした。

みると、ソフトをかぶり、美しく刈り込んだ鼻髭をたくわえた紳士が、ソフトの端に右指をかけていた。

「あのう……なにか？」

久美子は云った。

「おひまでしたら、お茶にでも附合って頂けませんかな？」

男は、おだやかに微笑する。

太いベッコウ縁の眼鏡。厚い唇。

ぷーんと、淡い良い匂いがする。

オーデコロンの匂いだ、と久美子は思った。義兄から、本当のお洒落れは、香水を使わず、オーデコロンを使うのだと、いつか聞いたことがある。

「あたし……約束があるんです」

久美子は云った。

「ほう、約束は何時？」

「あのう……八時です」

時計をみずに、久美子は云った。

紳士は時計をみて、

「いま、七時二十分ですよ。八時までに、まだ四十分もあります」

と云う。

久美子は、

「へしまった！」

と思った。時計をみてから、返事すればよかったのである。

「いかがですか？」

紳士は、図々しかった。

「お友達と、ここで待ち合わせてるんですが」

久美子は云って見た。

紳士は動じない。

「おう、そうですか。そらあ、ちようどええ！ お友達も招待しますよ」

いまだき珍しい、三つ揃いの背広である。そして胸チヨッキには、金鎖が弧を描いて垂れていた。言葉には、若干の訛りがある。

「いかが、ですか？」

「……………」

「わしは先刻から、あなたの、その長い髪に惹かれて、あとをつけとりました」

「えッ、あとを……」

「あまり、待ち合わせの様子じゃない」

「……………」

「それに、約束もあるとは、思えませんかな。いかがです？」

図星をさされて久美子は、

「ほっというて下さい！」

と思わず叫んでいた。

「ははあ、やっぱり、わしの思った通りでしたな、お嬢さん」

紳士は微笑した。

「思った通りですって？」

久美子は、たじろいだ。

「そう、思った通り。あなたは家出娘じゃ」

久美子は、その紳士が、人相見か、八卦見ではないかと思った。

家出娘も家出娘、飛び出しのホヤホヤなのである。

「失礼ね！ あたし、家は東京なんですから！」

ツンと歩きだしながら、久美子は捨て台辞をはいた。いや、その積りだった。

というは、その紳士が、のこのこ彼女のあとを追って——来たからである。

「待ちなさい、きみ！」

久美子は、階段を駆け下りる。

駆け下りながら、家出して来たら、それが表情や態度にあらわれるのだろうか、不思議に思った。

裏通りに抜けて、ほっとして歩き出すと、肩を並べて来た男がある。

へまあ、図々しい！

久美子は思った。先刻の紳士だったのだ。

「ああ、足が速いんだね。一汗、掻きましたよ」

紳士はそう云って、何気なく手にしていた洋書を一冊、

「すみません。ちょっと持ってて下さい」

と云う。

久美子は、紳士の額から流れている、玉のような汗をみて同情し、本を持ってやった。

紳士はソフトをとり、眼鏡をその中へ入れて、大きな柄物のハンカチで、額や鼻のあたりを拭きながら、

「お嬢さん」

と、低いが、凄んだ声をだした。

「はい」

久美子は警戒しながらも、素直に応じる。

「あなた、わしと附合わないと、泥棒になりますぞ？」

紳士は云った。

「泥棒になる？」

「さよう」

「あたし、泥棒なんかじゃないわ」

久美子は憤然となる。

紳士は、眼鏡をかけながら、

「ところが、そうなんだな」

と微笑するのだ。

「いったい、何を仰言りたいの」

「私と、附合いますか？」

「いやです」

「いやなら、仕方がない」

「えッ？」

「一緒に、来て頂こう」

「どこへですか？」

「その本屋です」

「なにしに？」

「えッ、なにしに？」

紳士は大仰におどろいてみせ、

「私は、単なる通りがかりの者だが、人が万引きするのを、目撃しては見過しておけませんからね」

と云った。

「えッ、万引き？」

「そう、きみがいま、手にしている、その本です」

紳士の声は、次第に大きくなる。

裏通りだといっても、通行人がないわけではなかつ

た。

「だって、この本は……」

久美子は、人だかりを気にしながら、絶句していた……。

……思えば、巧い言いがかりもあつたものである。自分のかすめ取つて来た本を、人に預けておいて、“万引き”だという。

他人がみたら、その万引きの張本人は、久美子だと思ふに違いない。

なにしろ、その本を手に行っているのだから――。

久美子は、鼻髭をたくわえた、その紳士を啞然として見成るのみである。

紳士は、遠巻きに佇んで見物している野次馬を、香具<sup>てき</sup>師<sup>や</sup>よろしく眺めやって、

「諸君！」

と云った。

「相手の許諾を得ずして、他人の持ち物を窃取したる者は、懲役十年以下の刑に処せられることは、これ日本国の法律に定められたところである……」

突如として、紳士は野次馬に向かつて、しゃべりはじ

めたのであつた。

久美子は狼狽した。

自分は悪いことはしていない。

それだけは、自信がある。

しかし、いかにも状況証拠は、彼女が恰かも万引きを働いたるが如くであり、紳士はそれを見咎めている善玉の如くであつたのだ。

彼女の方が、歩が悪いのである。

第一、万引きしたと覺しき、新刊本を持っているのだ。

久美子は、夢中になって叫んだ。

「これ、お返しします！」

と――。

むろん、手に預っていた本を、紳士にさし出したのである。

紳士はそれを受け取らず、小声で、

「どうかな。わしと附合つて呉れるかな？」

と云つたものだ。

久美子は、

「はい、これを……」